
一生、一緒にいれるなら。

二葉一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一生、一緒にいれるなら。

【Nコード】

N6107I

【作者名】

二葉一葉

【あらすじ】

ビュンビュンと自転車をこいでるあたしに止まる余裕はない。あたしはまだ死ねない！アイツが待っている！！いざ、行かん！あたしにとっては夜空に輝く一番星。

あー！やっぱりもうひとつのマフラーにすればよかったっ！
どうするっ？引き返すっ？

「それはムーリーリーリーリー・・・」

あたしの声に通り過ぎてった人が振り向くのを視界の端に映った。
ビュンビュンと自転車をこいでるあたしに止まる余裕はない。
家に戻るなんて、尚更ないのだ！

巨人ほどに伸びた自分の影を追い越すほどの勢いで、あたしは自転車
車で10分の公園に突っ走る。

冷たくなった風が頬に当たるけど、寒いなんて思わない。

それどころか、一生懸命ペダルをこぎまくってるおかげで手袋もマ
フラーもコートだっていらなくらいだ。

自動車と当たってもこの勢いならはじき飛ばせるかもしれないっ！

・・・なんてね！嘘です！

あたしはまだ死ねない！

アイツが待っている！！

「うきゃーリーリー・・・！！！！」

今日ほど電動自転車でないことを恨むことはないだろう。

公園に続く1本の坂道を、あたしは全力で立ちこぎして登った。

公園には、小さなすべり台とその前に広がる砂場、少し離れた場所
にブランコがある。

昼まで赤ちゃん連れのママさんたちの憩いの場は、小学生は素通り
するほどの場所らしく、いまは子どもの姿が見えない。

背中を丸めた男がひとり、ブランコを揺らしてる姿が、警察に通報
されるんじゃないかとヒヤヒヤさせるほど、怪しく見えた。

公園の出入口に自転車を止めて、あたしはマフラーと髪の毛を整え

る。

息を整えてる時間は、ない。

いざ、行かん！

『元氣出しなよ！』

『頑張ったじゃん！』

『泣くなよ！』

『今日ぐらい泣いてもいいよ！』

『いいオンナは他にいるって！』

「なんでオマエが泣くんだよ。」

「わ、わかんないけど！勝手に涙が出るんだもんっ！」

「あーそーそーそー……」

ズルズルと鼻をすするあたしに、ヤツはスポーツバックからタオルを取り出して渡してきた。

ヨレヨレで、どう見ても汚いそのタオルで、あたしは鼻水を拭く。

「臭い……」

「洗って返せ。」

泣いているかと思ったのに。

泣いてるのは、あたし。

コイツの名前を呼ぶのと同時に、あたしはすぐに泣き出してしまった。

「ゴメン、ね。」

泣き言のひとつやふたつ、聞いてあげて、励ましてあげようと、決めていたのに。

ジューズでも、この際ラーメンだって、奢ってあげようって思っていたのに。

……テッシュくらい、持って来ればよかった。

「友達でいたってよー、友達でいられると思うかよ？」

ぎいっとブランコが軋む。

「無理だね。オレは、無理。」

ぐんつと隣のブランコが大きく揺れた。

空はすでに紺色で染まって、星がひとつ、光ってる。

鼻の奥が痛い。

知ってる。知ってるよ。

アンタが、本気だったこと。

本物の気持ちだったこと、知ってるよ。

あたしはずっと、見てたから。

「チツ、クツシヨー！」

夜空に叫んで、跳ぶ。

あたしは、また泣いた。

コイツは、あの子にとってはどこにでも転がってるような石だろうとも、あたしにとっては夜空に輝く一番星。

「ブレーキ！ブレーキ！」

「うるせえ、オマエ、重いっ！」

あたしを後ろに乗せて、自転車は坂道をグングン下っていく。

ハンドルを握るコイツの服を握りしめる。

家に急ぐサラリーマンが迷惑顔で振り返る。

冷たい風が、泣いて乾いた目に凍みる。

くだらないことを言い合って、笑って、拗ねて、少ししんみりして、駅へと向かう。

見た目より、意外に体格いいんだなあって、思ったりして。

「ありがとな。」

いつも素直じゃないコイツから、初めて聞く言葉だった。

なのに、いつものようにあたしは素直に領けない。

「ゴメン、役立たずで・・・」

騒然としている駅前では、あたしの声は小さく消える。

あれだけ泣いていたのに、また涙が溢れてくるんだから情けない。励ませるような気の利いた言葉も何ひとつ、言えなかった。

「……ぶがつ……!？」

俯こうとしたあたしの鼻を、ヤツは遠慮なしにつまみ上げた。涙が目尻を伝う。

呆れたようにヤツは笑ってた。

「鼻赤くして、息切らせてやって来て、オレのために泣いてくれたんだろ？」

「……だって。」

「大事に、あたしを呼んでくれたでしょ？」

たくさん友達から、あたしを選んでくれたんでしょ？」

「それで、じゅうううぶん。」

そして、あたしの鼻から放した指先を、汚ねえなあって笑ってタオルで拭いた。

「しょーがないじゃん、泣いたんだから、鼻水出るでしょー！」

ホント、コイツはデリカシーもなければ、せつかくの雰囲気も台無しだ。

笑いながらタオルで鼻を擦りつけてくるコイツは、いつものコイツ。

「あーあ、明日は目も腫れて鼻も赤くて大変だ……。」

「あたしがタオルを奪い取ると、ヤツは笑うのをやめた。」

「ホントに、ありがとな。」

「……どういたしました。だって、友達でしょ？」

「うっ、言葉にすると照れくさいっ！」

思わず視線を外しそうになったけど、外せなかったそこに、満面の笑みが広がっていた。

「おう。一生の友達、だな。」

一生、一緒にいれるなら。

あたしはこの気持ちを、この想いを、この夜に捨てる。

そのかわり。

アンの一大事には、鼻を赤くして息を切らして、駆けつけるよ。
だって、それが友達ってもんでしょ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6107i/>

一生、一緒にいれるなら。

2010年10月20日09時28分発行